書簡が語る日下部鳴鶴と山本竟山の師弟関係

蘇　　浩

The Master-Apprentice Relationship of Meikaku Kusakabe and Kyôzan Yamamoto on letters

SU Hao

Meikaku Kusakabe（日下部鳴鶴，1838～1922）advocated “the Six Dynasties calligraphy” by influence of Yang Shoujing（楊守敬，1839-1915），and built a new calligraphy style in Meiji period. His disciple Kyôzan Yamamoto（山本竟山，1863～1934）received a stimulus in Meikaku’s movement, and decided to migrate to China aiming at learning of calligraphy directly by his introduction. In this paper, I will investigate the master-apprentice relationship and literati network between Meikaku and Kyôzan on letters.

Keywords: Meikaku Kusakabe, Kyôzan Yamamoto, The Six Dynasties Calligraphy, Literati network

キーワード：日下部鳴鶴　山本竟山　六朝書道　文人ネットワーク

はじめに

日下部鳴鶴（1838～1922）は、楊守敬（1839～1915）の影響を受けて、いわゆる「六朝書道」を提唱し、明治の新書風を築いた。そうした動きに刺激を受けた鳴鶴門下の四天王の一人である山本竟山[1)]（1863～1934）は、本場の書を直接学ぶために中国に渡り、鳴鶴の紹介で名家に師事することにした。本稿では、鳴鶴と竟山の書簡を取り上げ、両氏の交流と師弟関係を検討し、資料に基づいて、日中の文人たちのネットワークを考察したい。

1）山本竟山については、拙著「山本竟山と呉昌碩の文人交流」（『東アジア文化交渉研究』第12号、2018年、361～376頁）と「山本竟山とその書学の影響―関西大学竟山コレクションをもとに―」（『東アジア文化交渉研究』第13号、2019年、399～413頁）に詳しい。

一　鳴鶴と竟山の往復書簡

近代書道の確立者の一人で明治の三筆と呼ばれる日下部鳴鶴（1838～1922）は、幕末期に生まれ、字は子暘、号ははじめ東嶼、翠雨、その後に鳴鶴と号した。明治維新の後、新政府の徴士・太政官少書記から大書記官に進み、大久保利通（1830～1878）が暗殺されたことにより、翌明治12年（1879）に官職を辞し、書に専心するようになる。明治13年（1880）、清国から楊守敬が来日すると、巌谷一六、松田雪柯と共にその教えを受け、漢魏六朝の書法を研究した。楊守敬が将来した金石碑版の新資料により、鳴鶴ら日本人書家は大いに刺激を受け、新たに「六朝書道」を提唱し、明治の新書風を築くために邁進した。明治21年（1888）、26歳の竟山は、鳴鶴の岐阜遊歴中に入門し、書道の師としたことが記録されている。

鳴鶴が竟山に与えた書簡は数百通が残されており、その中の明治24年（1891）から大正３年（1914）までの日付のある150通を取り上げ、釈文を作成して紹介したのは杉村邦彦氏らである[2)]。この章は、杉村氏らが扱っていない新資料に基づいて、鳴鶴と竟山の交流を検討し、従来の研究を補いたい。

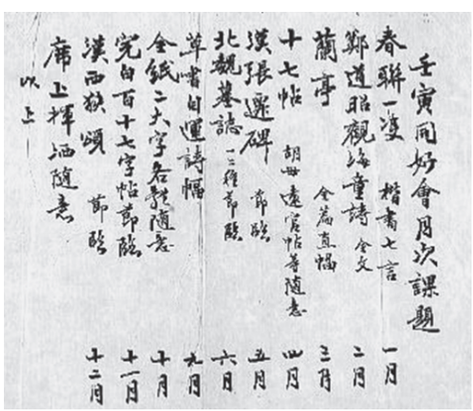

図１　鳴鶴「同好會月次課題」（関西大学博物館蔵）

図２　鳴鶴（竟山宛）東京蘭亭会書簡（関西大学博物館蔵）

図１釈文　（鳴鶴筆）壬寅（1902年）同好會月次課題

春聯一雙　楷書七言	一月	鄭道昭觀海童詩　全文	二月
蘭亭　全篇直幅	三月	十七帖　胡毋遠宦帖等隨意	四月
漢張遷碑　節臨	五月	北魏墓誌　一二種節臨	六月
草書自運詩幅	九月	全紙二大字各體隨意	十月
完白百十七字帖節臨	十一月	漢西狹頌　節臨	十二月
席上揮洒隨意　以上			

鳴鶴は、清国への遊歴から帰国して、明治27年（1894）に同好会を発足させ後進の育成を計った。鳴鶴が主宰した壬寅同好会の月次課題を見れば、『十七帖』、『蘭亭（序）』などの帖学派の作品があり、『張

2）杉村邦彦・寺尾敏江編「日下部鳴鶴の山本竟山に与えた書簡」（『新書鑑』第228～246号、1994～1996年）。

遷碑』、『西狭頌』などの碑学派の作品もある。鳴鶴がそれまでに身につけていた唐風の書風に、六朝書風が加味されていることに、鳴鶴の書道教育に対する姿勢をうかがうことができる。

図２（竟山あて東京蘭亭会の盛況を語る鳴鶴の書簡）釈文　廿二日郵信接到、足下滬上滞在中持病再発、御困難之由、更ニ左様之事トハ承知不致、異域之臥蓐、余モ其経験有之、深御推察致候。御歸朝後、今尚全癒ニ不至御様子、大切之事ナリ、無御怠御加養肝要ト存候。京都蘭亭会ニモ御尽力之由、御不快中殊ニ御困リト存候。珍品展覧多々、御盛況之由、御本懐察し入候。東京蘭亭会モ、非常之盛大ニ有之候。比田井・河井等ヨリ御承知之事ト畧申し候。星吾老人入門、御病気之為メ不果之由、不得已儀ト存候。孺初先生臨鄭碑、右軍遊目帖縮寫卷、星吾老人孺初伝等、早速御郵送御示シ被下、本日無事到達致し候。御安心被下度候。孺初伝謄写致レ置度、暫時留メ置度、臨鄭碑実ニ神品上々、我輩ノ為メニハ、遊目帖ヨリ遥ニ有益ト、今タ直ニ臨書ニ取リ懸リ申侯。卒業之程ハ受合レ不申候得共、幾分力臨シ候積リニ御座候、乍去此臨本ニ対シ、老拙程ニ心酔スル者、天下ニ幾人カ有ルベキ、甚心細キ盛ヲ生ジ申候。不取敢御答迄。匆々不乙。東作。竟山仁弟足下。二来月一度御上京由、大ニ御待チ申居候也。

「京都蘭亭会」が催された大正２年（1913）は、永和９年（353）の王羲之によって蘭亭会が催されてから26回目の「癸丑」の年に当たり、日本の京都と東京、中国では杭州の西泠印社と北京の萬牲園において蘭亭記念会が開かれた。「珍品展覧多々、御盛況之由、御本懐察し入候」は、京都の蘭亭会における発起人28名の人選が当を得ていたこと、天下の名宝を分類して学術的に質の高い展覧会を開催できたことを称賛しており、「御尽力之由」は、すなわち竟山と長尾雨山による王羲之位牌の拓本や蘭亭の清水を紹興から取寄せて祭事に使ったことなど、異彩を放つ翰墨の盛典となったことを明らかにしている。また、鳴鶴も東京蘭亭会で活躍し、会合を成功裡に進めた。さらに鳴鶴は、竟山から郵送された『孺初先生臨鄭碑』、『右軍遊目帖縮寫卷』、『星吾老人孺初伝』などの書作が無事に到着したことを報告して感謝を述べた。その中には、竟山が『孺初先生臨鄭碑』を入手したことを知った鳴鶴が、すぐさまそれを竟山から借覧し、くり返し臨書に励んだそうである。『孺初先生臨鄭碑』は、大正年間に博文堂より『潘存臨鄭文公碑』として刊行された。

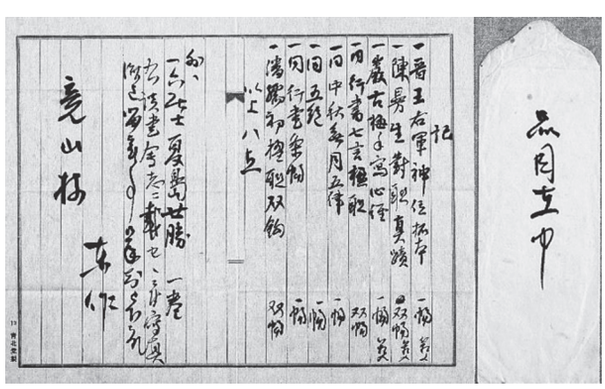

図３　鳴鶴「品目在中」（関西大学博物館蔵）

図３釈文　品目在中（封筒）

記

一	晋王右軍神位拓本	一幅　箱入	一	陳曼生對聯真蹟	双幅　箱入
一	巖古梅手寫心経	一幅　箱入	一	同　行書七言楹聯	双幅
一	同　中秋無月五律	一幅	一	同　五絶	一幅
一	同　行書条幅	一幅	一	潘孺初楹聯双鈎	双幅

以上八点

外　一六居士夏島廿勝　一巻

右『談書会志』ニ載セ候ニ付寫真　□□留置事御承知被下度候られ　　東作　竟山様

書簡の日付は不明であるが、『談書会誌』に掲載され、竟山に『晋王右軍神拓本』、『陳曼生對聯真蹟』、巖谷一六書道作品五点、『潘孺初楹聯双鈎』などの作品の借用を依頼したという内容がうかがえる。晋王右軍神位拓本は、京都蘭亭会で使われており、紹興蘭亭で王羲之を祀る位牌の拓本である。それを雨山が郵送したが、おそらく蘭亭会の後、竟山によって保管されていたと推測される。よって、この書簡は、大正２年（1913）以降のものだと判断できる。明治40年（1907）には、鳴鶴、中村不折（1866～1943）、近藤雪竹らによって「談書会」が発足し、鳴鶴を中心に隔月に会合して、当日に陳列した参考品を後日影印し、『談書会集帖』として晩翠軒から発行した。

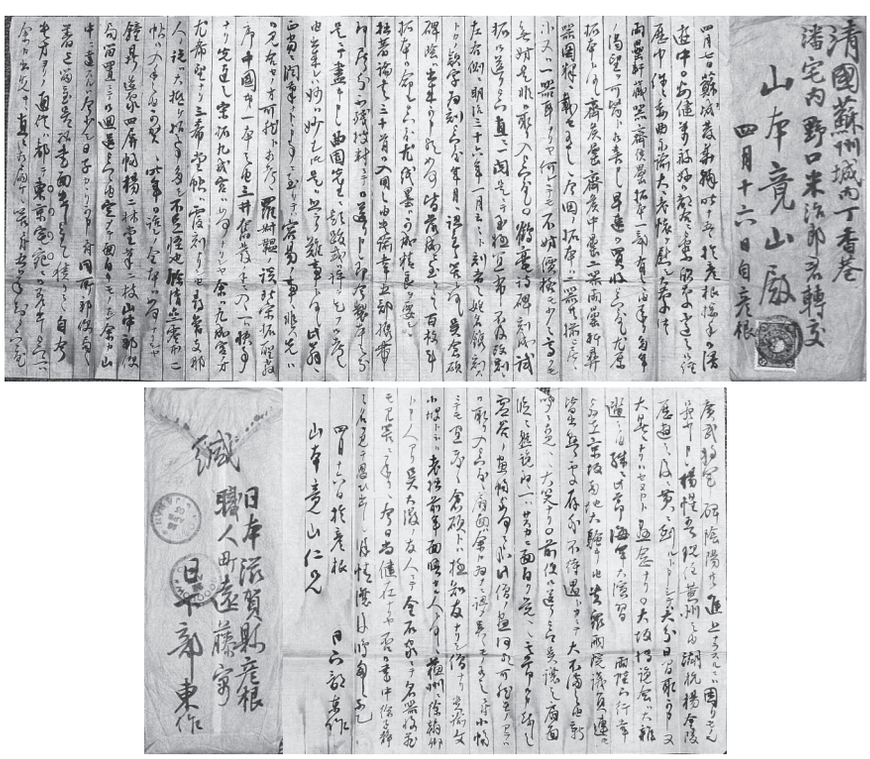

図４　鳴鶴（竟山宛）書簡（関西大学博物館蔵）

図４釈文　清国蘇州城内丁香巷潘宅内野口米治郎君転交山本竟山殿　四月十六日自彦根（封筒表）
日本滋賀県彦根職人町遠藤客 日下部東作（封筒裏）

四月七日蘇城発華翰、昨十五日於彦根接手、御漫遊中、安健萬般好。御都合ニ被察、欣慶不過之、御経歴中、件々委曲ニ小諭、大ニ老懐ヲ慰シ大慶仕候。両罍軒蔵器斉候罍拓本一部有之候由承リ、多年ノ渇望ヲ可医ト相喜申候。早速御買収被下度候。尤原拓本ト存候斉候罍中、罍二器両罍軒彝器図釈ニ載セ有之候。今回ノ拓本ハ二器共揃ヒ居候哉、又ハ一器耳ナリセ、何レニテモ不妨、価格モ少々高クモ無妨、是非御取リ入被下度候。鶴毫詩碑刻成、試拓御送リ被下、直ニ一閲是ニテ至極宜布不及改刻候。左右側ニ明治三十六年一月云々ト刻者之姓名镌刻ストカノ欵字、為刻被下度、年月ハ認置候筈ト存候。吳倉碩碑陰ハ出来可申欵、如何。皆落成ニ至リ候ハバ、百枚斗拓本御命ジ被下度、尤紙墨ハ可成精良ヲ要シ候。拙著『論書三十首』御入用之由、貴論幸五部携帯致し居リ候分、不残披封ニテお送リ申候、即今製本之分、是ニテ尽キ申候。曲園先生ニ題跋或ハ評ヲ乞フ御考之由、出来レバ妙ハ妙ナレドモ、是ハ恐ラク難事ト存候。此翁正当ニ潤筆ヲトノ事ニ至リテハ、容易ノ事ニ非ズ。先ハ御見合セノ方可然ト相考候。羅敦曧ノ談、北宋拓『聖教序』中国第一本ノ由、三井奮発手ニ入リ候ハバ快事ナリ。三希堂帖ハ覆刻ナリシ由、尋常支那人ノ説ハ大抵□□之事多シ、不足怪也。餘清參零本ニ帖ハ入手ノ由、可賀々々。昨年御話ノ全本ハ如何ナリシヤ。鐘鼎造象四屏幅、楊ニ林堂筆二枝、山中郵便局留置ニテ御廻被下候由、定メテ面白キモノナラン。余が山中ニ達スルハ、今少シ日子カカリ可申ニ付、同所郵便局へ着迄留置呉候様、書面遣シ置候積リニ候。自今貴方ヨリノ通信ハ、都テ東京宅宛ニ御差出し被下候へバ、余が出先キへ直ニ相届ケ候筈ニ付、右御承知被下度候。広武将軍碑陰陽共進止ナラスルニハ困リモト御察し申候。楊惺吾現住黄州之由、湖、杭、楊、金陵歴遊之後ニ黄へ到ルト申シテハ、大分日間取可申、又大暑ニナリハセヌカト懸念ナリ。大阪博覧会ハ大雑沓之由、殊ニ此節海軍大演習、両陛下行幸被候、在京阪両地大騒ギ之由、貴衆両院議員連モ皆出懸候処、存外不待遇トカニテ不満之由、新聞ニ相見へ候ハ大笑ナリ。前便御送リ被下候呉譲之扇面暇ニ熟賀致候へバ、サスガニ面白ク覚へ候。其節御申越し之虚名ノ画幅ハ如何ニ候哉。此僧ノ画何歟可然モノアラバ、御取リ入被下度候。扇面ハ余ガ為メニ認メ呉候モノ有之ニ付、小幅ニテモ宜敷候。倉碩トハ極知友ナリシ僧ナリ。貴諭文小坡ト云ハ、老拙前年面晤セル人と存候。蘇州ニ徐翰卿ト申人アリ、呉大澂ノ友人ニテ、金石家ニテ名器収蔵モアル筈承り候。今日尚健在ナリヤ否、御書申徐子静之名ヲ見テ思ひ出し候。餘情譲後鴻。匆匆不乙。四月十六日於彦根。日下部東作。山本竟山仁兄。

この書簡は、明治36年（1903）に蘇州にいた竟山が送った手紙に対する鳴鶴の返事である。まず、鳴鶴が依頼した「両罍軒蔵器斉候罍拓本」について指摘すると、「両罍軒」とは蒐集家の呉雲[3]（1811～1883）

3）字は少青、号は平斎といい、別号に両罍軒・二百蘭亭斎・抱罍子がある。呉の文人として活躍し、書・画・刻印の制作があげられるが、もっとも専心熱中したのは古文物の蒐集と鑑賞であった。太平天国の乱（1851～1864）のため、江蘇省の役人を辞職し、晩年は蘇州から上海に移って暮らした。青銅器・碑版刻石の著述としては、『両罍軒彝器図釈』、『二百蘭亭斎収蔵金石』などがあり、古印の著述としては『二百蘭亭斎古印孜蔵』、『両罍軒印孜漫存』などがある。

を指しており、両罍軒が氏の別号である。呉雲は、はじめ阮元旧蔵の斉侯罍を蔵していたが、さらに、斉侯中罍を加えて二器を所蔵したことから、「両罍軒」と命号したという。なかなか入手できない品格の高い拓本で、おまけに鳴鶴の長年の願望でもあったため、いささか高価であっても早速購入して欲しいと竟山に伝えている。一方、鳴鶴が揮毫する詩碑が出来上がったため、直ちに竟山にその試し拓本を「一閲」させて、中国へ郵送したという。鳴鶴は、竟山の審美眼と書に対する高水準の学識の一端を披露している。さらに、竟山によって中国へ持ち出された鳴鶴の著作『論書三十首』（明治34年）には、著名な考証学者である曲園[4]先生（1821～1907）の題跋があり、その評を乞うことについて竟山に相談したが、その実現は容易ではなかったそうである。そのほか、羅振玉[5]と筆談した上（羅敦曧ノ談）、三井氏が北宋拓『聖教序』を奮発して入手したことや、竟山が「餘清參零本二帖」を入手したことについては、まことにめでたいと記している。「三井」とは、三井財団の有名な拓本収集家である三井高堅[6]（1867～1945）を指している。竟山の中国遊学のもう一つの目的は、昨年師匠となった楊守敬を再訪問することであった。紙面に、竟山が湖州、杭州、揚州、南京などを歴遊した後、楊が在住する湖北黄州へ行くことに対し、長い日数と大暑の天候を懸念する鳴鶴の気持ちが込められている。加えて、鳴鶴と交流した文人たちの中、呉譲之、呉昌碩、文小坡、徐翰卿、吳大澂、徐子静などの名が連ねられている。竟山は今回の中国遊学中、これらの文人たちと交流し、多数の法帖碑版を日本へ持ち帰った。

図５　鳴鶴（竟山宛）書簡（関西大学博物館蔵）

図５釈文　去月廿五日御細書、昨三日彦根ニ接到、尓来御安適、欣慰何加。已ニ天童遊ヨリ御回滬アリシ事ト相察し候。老拙腰痛御尋被、下辱ク存候。暑早復常、去月廿二日大垣へ参り、十日間滞杖、本月二日彦根へ参り、暫時滞留致し居候。是ヨリ福井ヲ経テ、山中温泉ニ再浴可積リニテ御座

4）兪樾、字は蔭甫、号は曲園。浙江省徳清出身。翰林院編修、国史館協修となり、その知識を咸豊帝から賞賛され、1855年には河南学政となった。1875年、友人の援助で蘇州の荒れ地を買い取り、湾曲した地形を自ら設計して庭園を造った。晩年は杭州の詁経精舎で講義した。

5）羅振玉は、1902年に鳴鶴の紹介で竟山と知り合った。

6）三井十一家の一つ三井松坂家に生まれ、のち三井新町家の９代目を継ぐ。呉服の御用姓である源右衛門を襲名。明治27年（1894）三井呉服店社長となる。明治42年（1909）三井合名設立に伴い同監査役、明治45年（1912）監査部長。大正２年（1913）三井鉱山代表取締役、大正３年（1914）三井物産社長、大正９年（1920）三井銀行社長を歴任。美術品の収集家として知られ、書の収集で名高い。特に篆刻家・河井荃廬の強い影響で中国の拓本の収集に情熱を注ぎ、明治36年（1903）からは荃廬を東京に招いて本格的に拓本を収集した。

候。扨昌碩書画、前便申上候通リ正ニ査収、何レモ妙出来、殊ニ墨梅ハ傑作ニテ、欣賞不能措、直ニ表装ニ遣し置申候。印モ刻シ呉ラレ候由、印影御示し、依例甚高雅、東作名印殊ニ妙ヲ覚ヘ候。清閑堂引首印之堂室両家、何レニテモ更ニ不妙、御安心被下度候。昌碩御逢之節、厚御謝シ被下度候。呉譲之便両御送リ被下、熟覧候処、真跡不可動。仮令ヘ傑作ニ非ザルモ、身韵紙上ニ溢ル、敬服之至也。三円半ハ誠ニ廉ト云ベシ。泰山大字朱墨両様、三十字御入手被下候由、多年之渇望ヲ医ス謝々。何子貞臨『石門頌』一本御入手之由、妙可想可賀々々。尚一本御拽出可被下由、何率大願成就ヲ祈申候。鶴豪詩碑之件、彼此御配神辱候。花紋ハ素ヨリ漢碑ニハ無之、隨唐以来、事ニハ候得共、初メ必ズシモ古ニ泥セズ、餘リ小ナル者故、少々立派ナルオヨカラントノ考ニテアリシナリ。去リナガラ、必ズ前説ヲ固執スルニモ不及候ヘバ、昌碩、呉石潜諸氏御相談之上、可然御出来被下度、総テ足下ニ一任仕候覚悟ニ御座候。小碑之愚接其地、石潜ニモ好評ト承リ、大□即チ御事ヲ拓本到来テ頻リニ相往しや。匡喆湯島奈良誌碑装冊出来被下也。湯島奈良両種島分當ニ至候之事。承□仕御緩挽ら被下度候。嘉興鵞蛋之糟漬御恵贈被下度也。老拙寂大好物久々ニテ美味テ、賞スル如何ント。今ヨリ喉ラ鳴を叩し、師竹聴梅餘生分与し儀。承リ御誌種御送ハ、税之一件ニ付、塘兄□朝ニ御託送之趣相承被下度。香南精舎金石契二冊ハ、老拙未見本ナリ。參□□□兎ニ角御願置可申候。三希堂釈文御入手被下候由、謝々。前便御申越之三希堂石印楹聯、彙刻楹聯ノ紙等ハ、矢張堀兄へ一同ニ御託シ被下候儀哉、倉碩書画、先正事略小本之外ハ、一物モ到致し不申ニ付、定メテ御託送之事ナラント相察し候、如何。羅氏回滬筆話、御示シ、種々旧拓碑本御閲覧之由、為メニ足下之眼界ヲ開ク多々ナリ。見聞之広キハ、学書第一義ナリ。勉メテ御捜羅可被成候。羅氏再度懇請『書譜』之件ハ、已ニ三井へ御申遣レナリシヤ。未ナラバ、直ニ御申入可然候。宋拓聖教定メテ絶好ト想像致し候。麓山寺亦佳ナラン。サスガニ本場丈ケ、名碑ノ多キニ感心致し候。客中来人多々、一々不得御答。匆々不荘。日下部東作。山本竟山仁弟足下。

三井『書譜』、何分表装ノ日間取ニハ、三井主人モ大閑ニ、余モ殆困リ居候也。

本書簡ではまず、竟山が天童寺（寧波）より上海に戻ることが書かれており、竟山の第二回目の中国遊学（1903）にあたって、呉昌碩の友人の手配で、上海より寧波の天童へ行くことが書かれていることから、この書簡が1903年のものだと判断できる。続いて鳴鶴は、呉昌碩書画の査収にあたっては、特に《墨梅》が傑作であると竟山に伝え、昌碩が彫った印も優れていると述べ、清閑堂[7]所蔵の中では一番品格の高い所蔵印であると称賛し、三円五十銭の潤筆料は安い、と述べている。また竟山が、鳴鶴にとって長年願望していた二件（『泰山大字』・『何子貞臨石門頌』）を入手したことに感謝の意を表している。『泰山大字』は、著名な刻石『泰山経石峪金剛経』[8]を指しているのであろう。さらに、自己の刻碑・立碑（鶴豪詩碑之件）の詳細を竟山に伝え、土産の恵贈に対する感謝の気持ちを記している。続いて書かれている『香南精舎金石契』は、清朝の崇恩（生没年不詳）によって1900年に出版された、まさに最新

7）鳴鶴の室号は、三条実美からもらった「漫然清世一閑人」によるものである。

8）北斎・無紀年の刻。泰山の山腹の裾に「経石峪」と呼ばれる岩床に「金剛般若波羅密教」を刻したその通称。懐の広い楷書で、雄揮博大な書風。書者は諸説あるが、安道一という説もあり、鉄山摩崖・嶧山刻経なども同系。

の金石集帖である。三希堂[9]は中国内府秘蔵の集刻であり、どちらも中国の高水準の金石書跡と位置付けられる。もっとも注目されるのは、竟山に示された鳴鶴と羅振玉との筆談であり、「種々旧拓碑本御閲覧之由、為メニ足下之眼界ヲ開ク多々ナリ。見聞之広キハ、学書第一義ナリ」という内容である。鑑定眼を磨くことや、見聞を広げることが学書の第一要義であると竟山に周知させている。最後に、羅振玉が三井の『書譜』を購買するように要請しているが、それについては、鳴鶴が仲介人として手伝ったことがわかる。

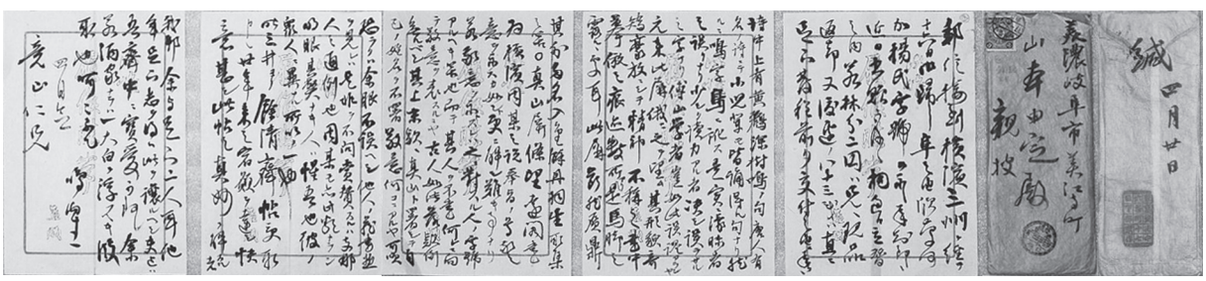

図６　鳴鶴（竟山宛）書簡（関西大学博物館蔵）

図６釈文　明治三十七年四月二十日。日下部東作。美濃岐阜市美江寺町。山本由定殿啓。

郵信接到、横浜三州ヲ経テ、十六日御帰阜之由、欣慶何加。楊氏字号御示之承知致し候。近日書贈可及候。朷過日立替之内、若林分二円ハ、兄へ現品返却、又渡辺ノ八十三叓ハ、直ニ足下発程前夕交付之由承リ候。詩中「上有黄鸝深樹鳴」ノ句、唐人有名ノ詩ニテ、小児輩モ皆誦得ル句ナリ。然ルニ鳴字鳥ニ訾ス、是実ニ濛昧者之誤リナリ。少シク読カアル者、決シテ誤ラザルノ字ナリ。傳山学者、豈知此誤謬アランヤ。元来此屏、俄ニ之ヲ望ム、其形貌奇矯豪放ニシテ、精神不称之、書中摹倣之痕迹数所アリ。是馬脚之露ル々処耳。此屏断然贋鼎其分兩名入金餘丹羽生取集之 。真山屏条、望遠閣書、為横浜周某之説。奉旨ノ尊敬之意ヲ示スが如シト更ニ解シ難キ来ナリ。若尊敬ヲ示トスレバ、之ニ対スル人ノ字号アルベキ筈也。而テ其人ヲ不書、何レニ向テ敬意ヲ表スルニヤ。古人如此落款例無ルベシ。其上末款ニ真山ト署シテ自己ノ姓名ヲ不署、敬意何コニアルヤ、可笑。恐ラクハ余眼不誤ベシ。他人ノ蔵書画ヲ見レバ、是非ヲ不問、賞替スルハ支那人之通例也。周某モ亦此類ナラン。明眼其弊ナキ人ハ惺吾也。彼ノ衆人ニ異ナル所以ノ一也。

昨三井ヨリ『餘清斎帖』採取申候。廿年来之宿願ヲ達シ、快意甚シ。此帖真妙ヲ解スル者、我邦余与足下二人可。他年足下志ヲ得バ、此ヲ譲ルベシ。夫迠ハ吾斎中ニ宝愛可致候。余荅酒家ナラバ、一大白ヲ浮ブベキ段取也。呵呵不已。 四月念。竟山仁兄。鳴雀。

この書簡は、明治37年（1904）に竟山が中国から故郷岐阜に帰った時の鳴鶴からの返信である。まず、

9）三希堂とは、王羲之の『快雪時晴帖』、王献之の『中秋帖』、王珣の『伯遠帖』にちなんで命名され、この三帖のほか、魏の鍾繇から明の董其昌に至るまでの名跡を収める。『三希堂法帖』は、清代の1747年（乾隆12年）に梁詩正らが勅命を奉じて内府秘蔵の書跡を集刻したもの、全32冊である。

楊守敬の潤例（刻料）と代理購買について打診している。代理購買品の中には、明末清初の名士である傅山（1607～1684）の書屏があり、そこには韋應物（737～792）の名詩『滁州西澗』が書かれており、「上有黄鸝深樹鳴」の一句においては、「鳴」の字が「鳥」と誤って書かれていることや、これまで確認されていない落款、真作のそれとは異なる署名などから、偽物であると鳴鶴が判断した。それによって、「他人ノ蔵書画ヲ見レバ、是非ヲ不問、賞替スルハ支那人之通例也」と述べた。すなわち、鳴鶴は、中国人がよく他人の収蔵する書画に対し、是非を問わず称賛する癖を批判し、楊守敬がそうした人たちと違って、良し悪しを誠実に分別していることに敬服している。最後に、三井氏が『餘清斎帖』を見て、その精妙さが分かる人は、日本には鳴鶴と竟山だけしかいない、と述べていることを紹介している。元々は、竟山が楊守敬より譲り受けた書学院本の『餘清斎帖』であるが、竟山がそれを鳴鶴に譲ったという。また将来、竟山が一人前になれば（「他年足下志ヲ得バ」）、再び『餘清斎帖』を竟山に譲り返すと鳴鶴が約束しており、相通じる胸中の心情によって、二人の密な師弟関係が示されている。

二　鳴鶴を偲ぶ会

鳴鶴が他界してまもなくの大正11年（1922）４月16日に、竟山は京都の南禅寺で鳴鶴の追悼会と遺墨展を主催し、比田井天来、磯野秋渚らの諸氏に出席依頼の書簡を送った。

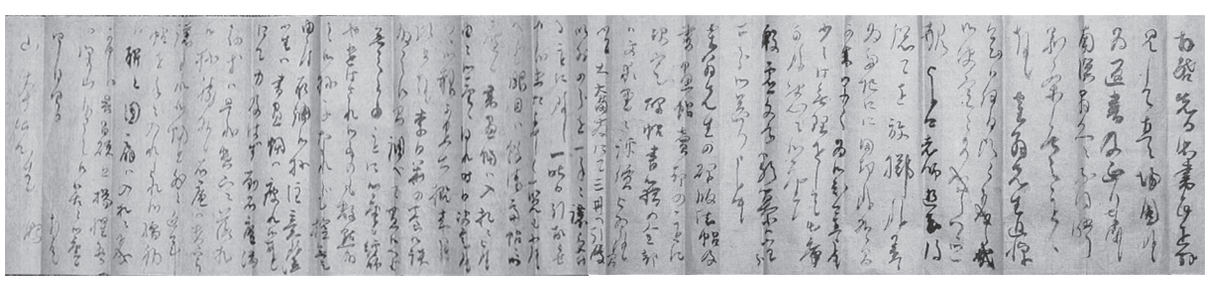

図７　比田井天来（竟山宛）書簡（大正11年（1922）４月４）（関西大学博物館蔵）

図７釈文　拝啓、先日御書面を拝見して直ニ帰國致候為、返書及延引奉謝候。南溟翁久々不得晤、別条無之ことと存候。鶴翁先生追悼会ハ何日頃ニ相成候哉。御決定ニ為成候ハハ御一報可被下候。老師逝去後総てを放擲致置候為、多忙口に困却致居候間、可成草々為御知置申度候。少しは無理をして出席可致決心ニ御座候。虚文字類纂ハ宜分二部御送り申上候。

鶴翁先生の碑版・法帖及書畫帖賣却のことに決定。碑帖・書籍の全部ハ文求堂ニ評價被為致候間、小生大奮発にて三井へ引渡以外の分を一手ニ譲受けることに致し、一昨日引取らせ申候。未た委しく一覧も不仕候へども眼目ハ餘清斎帖ニ御座候。書畫幅ハ入札ニ被致候由ニ御座候。何れ時日決定致候ハハ御報可申上、大概来月頃と存候。李白華の養口談有之候間、調べて貰候へば無之とのことに御座候。經師や遣はされ候ものも数點有之候様子なれども、控無之由ニ付取調候御様注意致置候。小生ハ書畫幅ハ疲れ候あとにて力及はず、劉石菴、潘存等ハ是非貴下ニ落札御抄禱。呉昌碩、楊惺吾。以下略。　　山本先生。鴻。

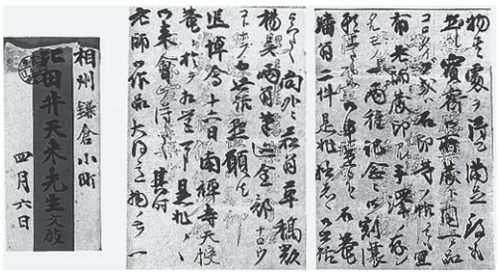

図８　竟山（比田井天来宛）書簡（個人蔵）

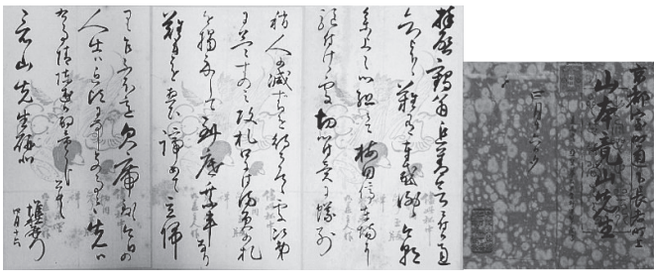

図９　磯野秋渚（竟山宛）書簡（関西大学博物館蔵）

図８釈文　大正十一年四月六日　相州鎌倉小町比田井天来先生文啓

物其処ヲ得て満足致候。然シ宝斎御所蔵ト同一ノ品コロタイプ、或ハ石印等ノ帖ニテも宜布、老師蔵印アル手沢ノ存シタルモノ一両種、記念ニ御割譲願上たく候。御申遣被下候石庵、潘翁二件、是非拙者へ御世話被下度。尚外ニ菘翁草稿類、楊呉両翁筆跡全部、ナロウコトナラ、御世話懇願候。追悼会、十六日南禅寺天授菴ニ於テ相営可申。是非是非御来会ヲ得たく、其時老師御作品大得意ノモノ一。以下略。

図９釈文　拝啓。鶴翁追善会ニ付、御通知被下候。難有奉感謝候。今朝参上之心組ニて、梅田停車場に駆付け候處、切符売に隊列、稍人の減ずるを待ち居候處次第に益すのミ。改札口には満員の札を掲示して、到底乗車なり難きを想ひ諦めて立帰り、乍不本意欠席致候。今日の人出ハ近頃になしとの事ニ候。先ハ、右事情陳述御酌量可被下候。草々。四月十六日。竟山先生研北。惟秋再拝。

同じ「鶴門」弟子の比田井天来（1872～1939）は、鳴鶴の遺した碑版法帖の多くを譲り受け、古典の研究に没頭して独自の書道観を築き上げた。天来の書簡では、鳴鶴先生遺愛品の碑法帖や書籍の内、三井へ引渡した品々以外は一手に譲り受けたことが読み取れるが、眼目は、竟山が将来して鳴鶴に譲った『餘清斎帖』であると伝えたことである。竟山による返事の書簡に「物其処ヲ得て満足」とあり、すなわち『餘清斎帖』が天来の所蔵となったことである。竟山は、先に知らせてもらった石菴、潘存の二件が、ぜひ自分に落札したい旨を伝えている。また、鳴鶴追悼会の時間と場所も天来に伝えて、来会を願った上に、鳴鶴が得意とした作品を展示してもらいたいと希望したのである。

一方、漢詩人で大阪朝日新聞の記者である磯野秋渚（1862～1933）は、大阪梅田の電車が満員だったために欠席したことを詫びている。磯野惟秋は、大正癸丑京都蘭亭会の主唱者の一人として雅会に出品している。また、竟山が主催した京都和漢法書展覧会に尽力した一人でもあった。竟山が、新聞記者である磯野を鳴鶴の追悼会に招いたことは、遺墨展を満喫してもらうだけでなく、新聞紙上での宣伝効果を期待したものと推測される。

おわりに

以上、鳴鶴と竟山の師弟関係および文人ネットワークを書簡から見てきた。師弟関係が結ばれたことは、楊守敬の来日した時期と重なって、鳴鶴が「六朝書道」を主張した時期でもある。関東を拠点とし

ていた鳴鶴は、頻繁に旅に出たため、竟山とは書簡での交流が多かった。本稿で取り上げた書簡は、内容豊富な点で、両氏の交流を物語る重要なものであり、また、頻繁に名前の上がる三井や呉昌碩、羅振玉らとの関係を検討する上でも興味深い。鳴鶴は、竟山にしばしば代理購買を依頼しており、それによって日中の文人ネットワークが結ばれるとともに、竟山の見聞が広がり、学識が深くなったといってよい。また、品格の高い碑法帖を相互に紹介し、原蹟への追求が精査されたことも指摘しておかねばならない。さらに、竟山は、鳴鶴の人格と書法を慕って、鳴鶴が逝去した後、追悼会と遺墨展を自力で主催し、師弟愛の深さを表明した。こうした諸々の事実関係を記した書簡類はきわめて重要であり、書を通じて日中の文化交流の足跡の一端を明らかにできたと考えている。

【付記】本稿は、2020年度浙江省哲社重点研究基地（浙江工商大学東亜研究院）項目『近代中国江南与日本的書法交流研究』（20ZDDYZS03）、2020年度浙江財経大学漢字国際伝播与書法産業協同中心項目『近現代浙江与日本的書法交流研究』、（科研費）2020年度国家社科基金芸術学項目『近現代中国書画在日本的流播研究（1880～1945）』（20CF180）による助成の成果である。